



四山藁

一

~ 5  
1183  
1



刊  
第 1189  
卷 1-2



四山藁序  
隨齊嘗以俳諧學為當  
時之宗匠其名詞奇句既  
存于世人之齒牙矣諧話  
二卷貝子色壽等叢集以  
襄于梓又有題跋記事之

S. 5. 2

文凡數百篇。六同加校。準以  
公之海內。乃徵序于余。  
讀之。其文皆如名香美錦。  
郁然而新。且其處之。勇行。  
狂言。獨邁。可以醒世間物。  
惜之。解者。亦不鮮矣。此集

題曰四山集。蓋取法蕉翁之  
行次。盛本瓢銘云。嗚呼。隨  
齋私法於蕉翁之厚。亦可  
以見也。已。因序。隨齋名。乞  
嘉字成美。姓復日氏。他富  
其號也。

文政三年庚辰秋八月

鵬齋老人與溪

亦真道人玄書

却嘉瑞刻

四山藁第一

隨齋夏成美著

豐島久藏

采津包徳

齋藤包昌

夏目包壽

同

校

望筑波山辞

東籬乃菊みづね咲て厚も耳にかふく小春より秋乃  
あし理をい満人と柳らりゆくひと葉のふ祢に棹はしは  
あや彫の流りのち枝多きき松松も多ちのせむむ尾花  
りした申ふへ乃露ふとひきと川をこの芦はあはひく汝より

くもりのたなく見甲もくはるこの水空に黛乃色水天のみをを  
おしてあふけおほふうり利に見ゆまれをけく波の山をうら  
男躰女躰乃うりけ峰らさやうにをうほまその神秀あり  
いふとさうれどかうら代のあまのいーつとさうこそなふとあくつーけ  
ふられさまハ春ハ嵐雪のむうさだのうすもあなむくはちのそ  
あのもくけの陰のつーく今ハ老杜の賦を飛鳥の入ふ  
けくあーにさふた三冬ふたれと雪けのうちをあつさう  
つもさきふえー万葉集乃ふらさけう免はてあひひやま  
ふとに新治の神泳あさーよと連歌すわきれさあさう  
なれるあそめてあま事のかきううと山とくもにうさなれ

言集乃みちうささきー仁者のたのめさといふあつをさう  
あいつとあくありすむりはわきさまの風色ふこと

代枕集序 安永癸巳年作

玉石のよろを寶也せうも枕の羽ふはけに一睡ふさけ  
草はらう岩もさうらふあまは海を登つて東漂西泳の  
まみらけさぬ中にもあまらふ中古乃風雅をあめらる落柿  
舎のぼろーに序りぬるま乃秋形うんかの枕ふはさー及古の  
中より古人乃さうねますすきひらねをうーとあまのね奴ー  
あつとえささして謔識即乃はゆふ葉はーぬーして抽出せる  
そのつとあれら名付きて枕の事乃あつはーをさ書さう

よとひひわらね〜後法師ハ風雲れゆ方を志し〜  
沈痾のものゝ〜しては〜にホヤ〜乃冬春夜法師  
未行乃を〜一筆のめり〜使ら〜くわ〜  
たりのつり〜して〜持の帰京小〜  
を〜  
魔も〜い〜海〜めも侍ら〜わの堂乃〜  
竹紙小す〜おあ〜おま〜に〜乃松を拂  
浅草の里夏成美随齋堂灯乃も〜に書

鷓鴣帖

天明甲辰正月作

去年乃むつきら庭のり免遊戯を軒の雀ふかあち

り〜は〜は〜は〜  
〜  
か〜申いて侍ふ

や〜  
我岩梅ふみと〜

乞食傳集跋

天明丁未年作

乞食ふ〜  
ある木蔭のちら椎は〜  
い〜  
わひねの木曾の椽の外〜

かきつる月ひ泳ひあつめてはゆふ風雅の多すけとたり  
袋のあきし重厚入道とついで竹雲のけくを辭して  
身を順礼道者の多しひ小はつらう東坡居士り上ハ玉皇  
大帝に様をばへふも悲田院を児に抱をうにせむといひ  
らじ和漢同一味のおすきあふく中あはれ替の紐をきく  
まはる漢學乃所人随斎成美

非仙集序 丙午作

或ゆふを列仙傳といふ文をみる侍りしに石を赤て羊  
とけしひはと乃中よと馬ををせ級を舟うてふみさうひ  
風をのこもれふあておねさうにはけしふふすをてあ甲

きさ百千なるはりれおをしるをねありをわすまてんも  
てゆくにちの中にかたおとわしけくはたねくかき  
はるる者のそとあははれつらうしや屋うくく  
くひのいてはよりけしあふくはやくはやくかき  
ちりてなうて真はきそやぬ思ふに文よくかく人乃草に  
ちりせたりはるいふあ甲くもあへあをうとねすしふくれ  
文章小實あくそたうく驚ふ人はれちるくわりのめ  
俳諧乃みちもあまふあふくいはく風雅の實を替とふ  
あはれ一時のいひもあはちりて後を手にあふらう人なく形り  
ゆふ傳らむその風雅の實といふを柄と笑はせうきんとこ

紅葉よそあり〜にわたるる變化流行のありきほふ  
ふく心をさうめてはて心よりのしゆくものおもははけて  
いひ出る詞花言葉も八重九重小い海をも百〜ほち〜ほ  
たれゆふ身と飛海〜と馬をも羊をもさけせらるるころ  
次〜て浪をほ〜をさけけりける多〜ひをを切〜すより安  
あ〜巧ふか〜と同様の人等あ〜ふ〜をさめてた〜俳  
諧の幻術小松戯〜多〜と〜と〜と〜

一夜流行奥書 天明戊申季冬作

浪花遅月上人將探奥羽之勝掛錫於余隨  
齋一夜篝燈相與作擬古俳諧至明得若干

首蓋余之於上人砥硯與美玉其復何論也  
但志好之所同或可以附上人驥歟遂鑿以  
示同好焉

浅草集序 寛政己酉年二月廿一日

かい屋をすけへ交ふ類反故を〜や紙の持れふ〜あ〜て淺  
くさのなる種のみ多ふ〜長〜長〜野色ふ〜り  
うふとき〜え〜古人乃はみ〜多〜糟粕をかき〜け  
ぬる料紙とふ〜りはれ〜みち〜れ〜あ〜た〜作〜も  
ふ〜それの雲耳ふた〜それのふ〜お〜は〜つ〜お〜言のを〜を  
つら〜多〜い〜お〜ひ〜む〜淺芽も〜ら〜見〜ふ〜す〜く〜傳〜む



りのをやはは集の趣形

志み結すも序 同年作

西を去るぬひのけく〜東を善知鳥ゆくを外う演とあら  
くの水のなき山乃多すまひを帰くけりきハかきるれは道と  
おほくの年脚病ありて一步をすむるより〜あく多に〜  
け〜ねえとひまの原くもけ〜けけれをま〜く乃すき人  
心おくれを発句をも書うめて物申へ〜是をよみけ〜  
山水乃清音あるにおもひよ〜てわの〜り東漂西泊の  
心を属かのおふけ〜り禁足旅記ハ人なた〜くおもふ交  
り〜するあれを原の多より文乃け〜ても物をもぬ〜これ

風下はうそて〜あ〜ちれ禁の處を〜んその人〜物り  
さちそするちけ〜て〜の〜り〜り〜り白氏  
経年不展縁身病今日用看生蠹魚とけ〜り〜り  
おもひを〜て〜ち〜け〜の〜け〜他意よ〜り〜て〜ん  
を海を〜の〜り〜も〜け〜り〜乃〜の〜の〜花も〜け〜り  
ホ〜く沙漠乃〜の〜り〜乃〜山の月も〜ろの泉〜り  
な〜あ〜け〜り〜の〜り〜の〜り〜の〜り〜の〜り〜の〜り  
の旅人隨齋夏成美を〜り

送遅月上人序 同年作

梢乃ぬ〜はの里を〜り〜り〜り松寫乃浦〜あ〜り〜り

郊のそれ乃雪をま〜ほ〜きすにま〜むけて出まの人も  
浪花乃遅月上人なるを其のま〜れふも〜ておろふも〜あり  
去冬の冬な〜んわ〜る随斎よひ〜けみを〜れてす〜河  
木〜を〜三海を〜歩を〜ふ〜て風雅のま〜を  
〜よりあ〜い〜峰々洋々の音を〜れ〜は〜て此  
春も根岸の里ふ雫をた〜り葛飾の梅乃ひ〜るを〜と  
おもひ上野歩草乃花のよす名大井ふ川乃桜のさ〜も  
君い〜を〜和〜を〜ひ〜けを〜は〜を〜と〜のさ  
け、彩乃〜らに〜む〜ひ郷音のよ急〜を〜あ〜ぬおもひに  
訓亦〜も萬の花多らほち散はま〜てあ〜とわ〜葉の

らほ〜り離別乃袂をよほ〜斧をめ〜〜て弦を多  
〜わ〜れを〜む〜らに〜る〜と心も〜と〜あ〜よに  
世の中は風雅を〜て玉め〜りす若を〜らに〜お〜る名  
利〜は〜れ〜て山水の眼〜〜上人名〜利のは〜り  
〜清ひ〜と〜西行宗祇の君跡〜を〜つ子〜世氏の翁乃  
詠哉〜て〜東奥に〜れ〜る船澄のた子を〜らひて貞享  
元禄のむ〜〜よ〜な〜ひ〜を〜や〜と〜ふ〜れ〜人のま  
を〜を〜ひて求〜り〜あ〜く〜ひ〜ら〜ん実小泉石をもて  
〜人〜とい〜る〜君〜〜此心を〜杖をめ〜ら〜る草に  
〜せを〜〜のひ〜〜に〜のま〜〜人〜風雅の正道よ

入唐しはれども上人の風格をさくさくしあふちふつてよろこぶ  
ものすくなくむねもやまをきく得けり人少くあそびあそび  
きつてよろこぶものも海内書乃松象酒は月

母れ七十をこふまきくみあ月夜にけりこ氷室の氷あを  
あね流る酒を一杯の壽をきかしの遠業のいそぎと  
あふり水あふり

乃小一日不二ふの屋家あむひう那

ちり此後いそ春秋の寒暑を清くはき具七種を救れもの  
をそへりきか

寄杖

つらうらに清水そよよ舞霍の腔

寄團扇

風をそよよ舞扇工老もきまきなる舞

寄紙

夏菊やふそあうかきものいそかき紙

寄酒

一夜酒かきけちた醸しり

寄綿

いな月や身をほろひる雪水

寄炭

りよといへも 齡をたもく 風炉の炭

寄鞭

夏風傳もあらくも 踏ぬ風情を

寛政元年六月一日

氷砕くをいひる守

我男のせむ  
いひる守  
のせむす

いひる守をいひる守  
我男をいひる守  
のせむす  
人の故よりいひる守  
の庭刑をいひる守  
豚見包好  
後改  
包壽  
佳例ふかしのせむ

首服をいひる守  
我男をいひる守  
のせむす  
いひる守をいひる守  
のせむす  
いひる守をいひる守  
のせむす

寛政改元年六月一日

湧出臺記 寛政庚戌年作

臺の湧出といふ  
雲煙を壁にめらる  
月乃らるる

寄炭

りよといへも 齡をたもろく 風炉の炭

寄轆

夏風傳もあらくも 踏ぬ風情を

寛政元年六月一日

實しよふ 氷砕くまよひむろ守

此句をいつのむろ守をいふ人我男をうせり時女又のふろ守  
辞をいふの心を冬に氷のまを月をきて 踏ぬまをいふ  
人の故にうろ守をいふも 實を失ふまをいふか  
との度刑をいふ 豚見包好 後改 包壽 佳例ふまのまをいふ

Handwritten note on a slip of paper at the top of the right page.

首服をうろふ我悪まをいふて 示はるま 詞をいふ  
多し世一の心をけたくま 持の心をけたくま 包好  
ふれ汝のうろふ父の教をうろ けまをいふて お孫をいふ  
まをいふま 詞にのまをいふ 氷れ上をいふまをいふ  
心をうろふまをいふまをいふ也

たははまをいふまをいふ 氷をいふまをいふ  
寛政改元年六月一日

湧出臺記 寛政庚戌年作

臺の湧出といふまをいふまをいふ 二万由旬碧瑠璃をいふ  
まをいふ 雲煙を壁にめまをいふ 月乃まをいふ 星乃林

陰ふるを志けきとむしきねの筑波山あるを後に三軒屋く  
涉る川のたうれは足けしひきしぬへはおもをわら狭室  
暑を志のまにあどと形くある者に形をほるに町の者ゆひ  
その屋のくは小土居をうほへ板をわら一庇をほくこを

屋くよあはれのわらも三四人う涼む屋まわらうハ  
こいふけを持のりよくせむくとりふりおのま  
いハ赤工乃あらくしきなきくむうハ浅草大工と  
いハ赤工乃あらくしきなきくむうハ浅草大工と  
鼻むとめうしていとよるうけくひぬかくて木を志と板を  
志くいせりして屋をめて来て一日うわらふ造り終れり

浅草の屋を  
てのうらふらん

はおもにふくわと出たしむやうにおほえてそみに世文字を  
早たさうて暑を日あはに陽島西のやりに新おはる流り  
世うへよまひのあらそのひけきハ毗耶居士乃室よりいせまく  
め志上人乃松の床よりよきへは屋へはれと世乃うまよりい  
すみよくて志うくく塵外乃あはひをまは上野浅草乃薨  
るるふをうはれまみ川をまのち山乃う歩にかうれて流の  
ま急所くよ志えあると市井眼下にありあみて夕くはの  
花咲くはととあくハ乃蚊屋にたちのほて確のひきを  
雪端よりきけを形身あらはち仙をゆるうやおもハ独坐  
云言ふして塵腸を風はくハあうを交らひうふと

陰ふるをまけまをむしきねの筑波山あまると後には新屋く  
渉る川のたうれは足けひきりぬへはあともわら狭室  
暑を志のまねあまると形くある者に形をばるに町の者ひ  
その屋のまに小ま土居をうは板をわら一庇とをけくを  
けらう甲の屋くまあねのわらも三四人う涼む屋まわらう  
心安かむむしひけを枕のまらくせむくとりひりおのま  
やうあ後工乃あまるとまらうまらう一浅草大工と  
いふあ鑑まもきまらるる物の上子乃す急にけらるまや  
鼻むとめうけていとまらうけくひぬかくて木を急と板を  
志んいせまらうて屋をてもてあうてあう一日うわらふ造り終れり

浅草大工  
一  
あまるとまらう

はあまらふくわと出たりむやうにおほえてまみに社文字をまて  
早うたうて暑あ日あうに陽島西のまやりに新おけらるら  
けうへままひのあまらるひけら毗耶居士乃室よりいせま  
め急上人乃松の床あまらうはけらとせ乃らまらうりい  
すみよくてあまらう塵外乃あまらうをまら上野浅草乃覺  
まらうふをばれまら川をまら山乃らまらにかうれて流の  
ま急所くま急あまら市井眼下にまらあみて夕うはの  
花咲くはまらあまら乃蚊屋まらちのほて確のひきを  
雲端りまけを形身あらほら仙をゆらうやあまら社  
云言ふて塵腸を風うけらあまら交まらひらうまら

して酒の之程勺を酌る祢々々に如危れる鳥は得意乃交せ  
るはへく新小飛ふかを不もわあぬふりては形してむつき  
かの長明、日所山可け乃すももたは車二枚乃わひひ  
ありとみひつたふと大り奥に居る人乃ひまかめらる  
めくもつるは屋乃うくに安き心ありそのわり居るいせ松蔭の  
かり木乃えとてけい居てまゝ馬うゝあれはけり仙をうと  
けりはわきあえてい昔天地乃崩墜をたをた若あり  
ゆゑ乃人あれをわらふ子列子形やその者をまにわひひて  
あやふやや何ふうはらるとたんと心にひまむややまらわれ  
もあやふは臺をぬのひてはらりあやふうまらるるに

似るも中より生滅無常乃ありはあれよとあやふかすも  
あはれとひいてあやひりわひひて居みぬ

愛土瓶辞

ほひにすむまよ一爐をほけけむ乃土瓶をけてひ絲を  
す茶をすむあま日六盤をけくして後ひりたむあや  
あり鉄を古くはれを繡乃氣出多利々にあはれ銅まこ  
ふほひあると真瑜といふもの、世ふ今めりわむよと  
あやまのまは、質素たるをよほくぬ思ふらまりあや  
たうれてかゝら心戒僧都乃うつをまねたりけりあふ  
菰蔓をわひみてあふたけま色もよを進退を自在に



土氣はくの水をすばし川の脾胃を辱しなふに  
 あり炭わたり茶わく肘もさきくといふ書を出して志られ  
 きあえ松風堂きとえ西上人乃よりけり常阿浮うし乃  
 宿乃ありれまくと廬山竹樓乃ありおとすておもひわさけり  
 かこまの人を書をひりて古人をさるすこや酒を友  
 とし琴を交り竹をさるして世君乃名をけし松を  
 むく乃中もさるよあまわさハ世士瓶乃うさるにあらをさし  
 世のおとさひしきをさる中閑をぬす世渴をさるむるに  
 あれり屋を茶をのりて蟹眼連珠乃候ともうかをい  
 る母一盤を切てみけむせいのもかきまるとあつく中書す候乃

三猿箴 寛政庚戌年作

をけりまもれあは兄を久二といひ妹を系とよふ志しらく閑を  
 して批りよれを座してさくくゆふいふ筆を握り書をあら  
 あれをすうせをよゆさひてけりすかたをさる白眼を  
 足まねを泣おちて耳かへはしあうも妹もたふせん中  
 毛せむくの人老心りのあうひてはひにけりあし  
 得すゆきまふけりいかにたれおひ物むとらつあやめ  
 るとせしけりとらつし口りちちのれを袖りする里ちとまふ肘を  
 さげふ捨りれものあり兄を孫りす急妹を左りか交  
 のせて三猿乃あそひをさす持のはりうう次久を

土氣はくは水をすばし川の脾胃を辱しやふに多し  
あり炭ねり茶わく肘もくくといふ書を出して志れ  
きあえ松風中きとえ西上人乃よりけり常阿保うし乃  
宿乃ありれきく々廬山竹樓乃ありおとすてあひわさけ  
かこふ人々書をひりて古人をよめすくや酒を友  
とて琴を交り竹をよめしとて世君乃名をけし松を  
むく乃中もよめしわさハ世士瓶乃くくはふれをき  
世のおとさひしきをよめす困をぬす世渴をよめむに  
あれと屋を茶をいりて蟹眼連珠乃候ともうめをい  
る母一盤をひきあけむ中いへもめまもあしく中書す保乃

三 猿 箴 寛政庚戌年作

をけりまもれあは兄を久二といひ妹を系とよふ志しらく困を  
ほり机よりよれを座してさくく中よりいふ筆を握り書をあは  
あれをすうせをよめさひてけりすくくくをよめ白眼を  
見まぬを泣ねちて耳かへはくくも珠もたふせん中  
きせむくくの人々心けりあひてはひにけりあひく  
けみくちふしけりけりおひ物むくくくくあやめ  
折もあふおれを門下ちちのれを袖けりすくくくく時と  
さけく捨くくれものあひ兄を孫けりす急妹を左けりかま  
のせて三猿乃あそひをさす持のけりくくくく次くを

眼をよき糸を耳城かきし一糸の中にて口をおほふ  
こき三尸をけりしつ小庚申乃夜の神すうとありとこれ  
を三猿乃あをひやまつきて終三暮四にわくし一侍  
か乃五禽乃れもあれよと心を屈しなふ志をばさきと  
侍はくしおもふ久くは多かる眼片し乃人をも  
なふかまの魚をきてか目ふと終てはうまきまきひに  
身ををちうく流る小娘の物の情なるほともちうはつり  
おほまたちあれおふ耳あききて花下うの海人のあ  
のもゆあきいふな五色を人乃目志ひ五音ひひのみふ  
せむとを扱られはけのに吾益の糸をあのそと人とあふひ

或とうみいふれてゆきあまたいあり犬乃よく  
不ゆをよりや世次人老るを物いを賢と世次しや  
今より世抱いふ所乃うをわの身乃いはしわや  
なうくはをい多鼻乃あうくまうふめむやうて三猿乃  
歳かきてうつわい侍わのけつ二子りわうらあふ  
侍

題湖了閑窓 寛政庚戌年作

じう一芭蕉乃翁晋の瀏めをうやめ句あは日  
窓あふしひる藤乃墨や簞  
湖了主人のけうく屋をうけやみてひの乃窓をひく

法に酒を多しと狂句をよみて杯をふくみて風を  
まら句をばくうては月をむくはくりに暑をわかれ俗を  
らすきてみゆう義皇上乃人たるも多う酔て福を  
れを次六象階を羨りあはれむとあはれにきこえて  
玉をひねひ珠残あひむかす治や白河の句をばつ忘に  
面をけすすへことわまきまはのうやみをこをといはる  
けりるをあらは

世にまじく実や心乃あうりし治

一日湯治記 寛政辛寅年作

夏乃木くらけりるうたふ山やうけりるわつ川し法林  
庵下驪山乃蔭をおもひよせて一日湯治といふ移ひをあら  
大なる湯ふみにまみり川の水をくみ入多田は森の葉をむけい  
てゆきゆのりやをばはるふあはれみらけるるまをば詠る  
塩といふもれをおほく加へ入をれをよく暑濕をばはれはく  
涼をひきあに浴する同好乃士六七人句をねらひて心を  
あつと他を求めて居せらる人く乃一日の居りやひにわの  
やまひをあら移みむといふはきりらあのおのく句案を  
らあまのうう果のききみり調くあしはひくく  
山居乃趣をうけす鬼貫う禁足紀行の側をおもひ晋子ら

新山家跡あそびり似たり

夏菊も温泉乃香よわゆるひきぬる耶

主治 古をわらうそ替を散し 今をひいて氣を  
和し肉をけふきく食をそめ庭をわめて  
筋骨をわらうすなほ吟掃を一洗せし  
あけ後乃他意よくわらうとくく  
多しあれまその切を考へまらぬまは

つゆいづれ樵夫夏成美也

海嘯記 寛政三年辛未作

今年八月六日朝より西の風をきき吹て家をやぶる  
恒と多ふすもおほくなりし夜の夜東海乃水をうけはき

あつちと泰山乃ありにさす津波中のみえり  
徳中河洲等乃あり且る中波乃とあつたれり  
まひをけらるるまは定けられ及るはゆる  
さふより形或る形のくにははるまは枯れり  
わゆる命ひりつを多し魚もねを心かてうあをう  
くむるにありねをさひあらかぬき妻子を溺し  
ひりき老より老を浪よりれて跡はるい乃ちをさ  
あつちとありす悲しひまけく都のいり野乃虫のこ  
くよおえはるたてしうらむら林乃世人のあつちを  
うらみ跡りまは老と十人中にひとりありたるは

たぐとれゆふ乃家然らるるものありす海へ入ぬまきく  
乃これ命城はく名ひこまももさうりあくるは子乃すき  
いひこ那はれたるあにゆらもて高乃らうもはくあはく  
まき井り人ありきもむきくくもさうさうりなり  
船わさるいこ乃まきす伊豆お操安房上総ま屋を海へ  
まき玉浦と山ちり記さう山津波と小津にあられて人  
お母く矢ぬいふ下をあそびひ民をやまうす  
漸改まらうてふ海まひ旅をあひてたのりゆら中に蒼海  
何乃いれり事ありまのり波乃ら記めいみるさや天地  
不仁りふて人ら魚勝たらぬ計ま海ら記里く

夜にいつりてまき火をえ出老女のわらわらけけひよまよ  
こま歌あはれさあえ侍をそをを笠に身乃毛ゆらう腸  
まねらきれぬ屋へおまのりわら人さるいおえひし海乃  
山里もあはれをほらゆらゆらに栖をいさひすきまひを  
求てやうくまははさ侍をまきあそびあはるあさなり  
らるまはまひを福乃よりあまきまわけて世の中まはら  
らひちるお居乃らあままはまきいさるまはまきまひり  
なりゆまちるまはのりまきあはるあそび

淳海松を楳乃かちて月かま  
秋はまぬゑ乃餌とちるまきり

家より多く人にあましく秋乃こゑ

奥羽記行跋 同年作

船より舟を海川、島乃浦の持の松陰、筆をぬき、巧く此  
沼乃花の川を、草鞋をむすひて、ねふ乃花、象沼乃江、  
ひき、臥乃ね、あまをすむ、あつ乃み、ね、津南、船の旗、  
江を、あ、ね、襷、走、り、千、寫、を、お、り、ひ、屋、と、酒、田、乃、掛、湯、  
茄子、の、水、山、を、け、る、を、む、山、川、九、千、里、を、わ、る、  
処、く、乃、風、士、を、あ、り、さ、て、俳、諧、や、七、百、句、を、詠、  
日記といふものを、閑す、に、猪、地、乃、風、色、を、寸、紙、より、め

日、あ、る、乃、あ、ま、む、き、を、目、の、す、へ、に、を、ま、へ、あ、ま、と、け、  
それ、ら、う、に、あ、つ、海、よ、る、あ、ま、は、日、れ、あ、ひ、ね、を、海、  
い、ふ、屋、持、の、あ、ま、に、一、草、加、へ、よ、ま、よ、と、い、ふ、  
去、来、庵、宗、鑽、法、師、草、々、り、あ、れ、と、の、と、海、  
随、齋、成、美、な、る、を、寸、紙、翁、曰、  
あ、つ、す、い、を、ひ、く、く、の、な、り、れ、せ

塵取集題辭 同年作

古調、守、老人、の、か、け、る、家、の、集、め、く、も、れ、ら、う、と、  
あ、ま、に、み、は、く、く、影、り、て、ら、う、と、  
あ、ま、を、か、ま、の、め、て、心、乃、く、れ、  
あ、ま、の、山、と、あ、ま、め、ら、う、は、

芭蕉翁の風雅ハ佛祖の肝膽をりや後の原逸傳の賛  
辞にも及ぶれど俳諧乃縁語をもとめておのつゝ五  
の藝をこゝろに心ありやをいひてその巻全のね  
おしをわれわうとて時老人とはひり連句して是非を  
辨し左より巻ひ右のねさゝ多しあれも二十余年  
のゆめおまけ巻をひいててあつらひ目のまゝより  
其の子いまの調字又乃其のもの一言隻字もおぼろに  
可成十幾ひよりひき匣りかくせる志のやうに感へ  
其のまはあまひもつゝきりその求りはうせまひ  
鄙語を加へ早

めに幸へておぼろもあつて昔

黙齋記 寛政壬子年作

原はあまのり色をうととおひひちりけり  
の名をまのりか  
ひてみゆりて歌と名なる者ありと本土  
あはれをわけて  
ちやのすまは風ふとていふ志あり  
武藏乃て山に雲を  
わひて秋をせはひくたをほさうての  
るも乃すみうをいひ  
かより俳諧の風雅をまのりておす  
まゝにせられり  
これ長ぬり方丈の糟粕をきく  
ひとの斎をあつたはけり  
りてあつてなり乃は  
雲をむひの中より  
あつてふはけり



心の泉に垣ひかきし一六の窓あはくをけりて僅ふ十七字の  
他意に趣をめりし昔も人人の世に可いはりきを  
いひて体の中にけり入ひてに哥うはむといひ風程  
似たりはひよふらふにをひらく世事をいふはきりあを  
くくす多ましくいひあむ向あれともあは人乃耳を驚く  
かあは人の心をけりしはあま一熱雷乃あはくもいふあ  
ひたりし一齋を心のあく所にあらくひて車二輛り引つ  
まへまわはしひま一花を東向は居る上野淡村に  
おもひをはあら月まの南にうりて深川みつはるは程を  
あられいぬをひては廬山の帯をあらひ吾をやうとら

昊天を射りしはくむその心中むろくかきりあきあはく乃  
くある人のふあはくその人の氣質はその山の險易と其の  
水は清濁をふくむありと其れ又すやうな程の  
ふい土堆ふくく隈ひろく山川の美あはくゆ急りくる物  
あのみれ人をも出せる程くくはむさくはひはきり  
ほくくつゆく廣莫の徘徊は何そをむ事いふあてあ  
其の人姓は某名を葛三世元はくくておれをれを友人  
かほくは夏成美あは

柿枕記 旧年作

崖我乃柿の本あくく山の何れ風よふうれて屋根はる

おと座り清あけの春乃はひりさをうぐやみ咄く座の軒らく  
植おける柿の本ありしうかたおとく香越の野分にもやれ東  
叡の巧しきよみ花おとて實そほしん葉をわろくと  
あはれていそほしきかれ果ぬ社本乃なごりもあまらけと  
あやしきけり揚籠の芥をめろしき妙観のわさをとりて  
切て三股とけりかづけて掃きさるるやの顔子らあの一  
ひそきけり清氏うけりてはも社一物よりあまらけり  
外月よはあまらけりね時ぬに歌て句をまめ情をめろ  
すにたよりあまらけり人の文字をわろしき云上に在し  
いひ馬のうへは身體をわろしきはひつを殊は清くは

われハ多枕のうらまをまのうらまといひ多主人ら中も  
一睡の齋をあまらけり

句合跋 旧年作

僕をつらねて血は流し和氏う玉はけにあれも是をまらも  
たすくけりしやゆめらむり西行法師ハみけり乃  
うをあらめて定家郷は判をあひてより何んをけりめ  
あまらけりかめりしにすめりし素堂老人のほろしき  
流りあひしれあまらけり命て今の世に定家郷とたの  
むい人あまらけり判のあまらけりはあまらけりかあて好  
悪をわろしきあまらけりあまらけりも似とまらけり世人の

褒貶不履はくそけの隠士乃あつたさうしけも情あへ  
まらやれ多れの人うよく窮く洋く乃者をおひひまを情  
んやい戸母口序百句詩題詠はひを五十にまらちあれ  
凡そや一せまそておらう歌 わき 俳諧のたをあれすふま  
よま心を入情れとも情もあく友まちう女う一明を吾た  
りてわ 句乃推敲了たふあ情ひ情れをまして物さ  
め情もせめれさるあを加へん事 少門不あひもさ  
うし志もくを沙法いをむと遼東を豚をめ情く  
おもひ燕國の石をまうくしせれひうあつたえさるまむを  
ふまひみまひ辞一乗まらもゆき一明たれさるまめれ

お乃まらあのみ研にはうせていけり勝者をふく一早ぬ情さ  
えせ心りまうせさるあままハかちうくもあ情けうなく願く  
女牛に腹はくれさるおもひふかのあつたをさるあうさうむ  
ふまら一まも男におひ情まは わき ちやよる定家卿の  
鑑識まられを耳ま一山のみ情一人をまらたひあ屋  
きもけく小らち情一の口ひくまうあうくすこと

一 鐘集序 日年作

はくくといのをおまふにうらそてをらあまれまら鐘乃  
おらうれ鯨音あそく吼て秋乃あつた情うあく亡居士  
一周の往りをあまひて男子巢兆懐旧乃集はるうけ句を

はしめたすゑておろしむにふるきをよのよなさらしとわくひを  
つれめ眉をあらめて句この精愛に方寸をせむまに春秋唐の  
ほらみして居士耳をうらひ唇をほらして生ふのおもひけを  
目のほらよらうとて誰くともあらはをしとておもふあやう  
あれり事を乃句をくらく菟路の鼓舞を梵唄林を  
かへんす晋子の章歌くしとてくらうつれしといひ五老井の  
手尔彼をもてくらうたらふまといひしにれはてして居て  
極樂聖衆の喜樂なりとおりのひよをゆるたうしわき千位  
のまにひし歌をれし乃拘るるをきく所く蕉翁のめり  
おと葉もおりいとせてもあらぬ魚のたまををけへ一味平

等の手向かかす人形ぬ屋といはれり世のけり  
きをさる

朝来集序 寛政癸丑年作

世りかられさる人の後のよにかうりもほらるかきまらむら  
世の徳乃あらまといひらるおほくしとてゆるゆえたらわ  
芭蕉は海一葉一笠に必をかきて杖をさけり草鞋を  
ふるふ泉石の間へおりひをわらへしとてゆるゆる  
卧むわひ果し西上人の抖擻をくらくしとてはひに  
浪花江乃芦れれ葉のうきにかられてよと既百年の歌を  
かきゆると世の道をはらひて徳をあらふまはあはをむらへ

神をまひり昔をあひまのそけのひびく東奥の一草法師也  
海と楚のひびくとして法ににおきけの徳を志す千里の逆  
旅をすまの空にひそせあまふり鹿島乃浦に杖をひき  
はいて板ひけりいそふりけりいそふりむらりありて志す  
笠をすめりいそその里乃何某といふ俳士多し人とわら名  
よりれむといふ翁自深乃多んけくをきけひめもをりし  
けりゆ急ありとて法師よりちれぬけりし小禮をゆきおも  
ふに此處の楚のかと根本寺にゆきうひよ公羽の衣をぬ  
けりましあまも多しけりけりけりけりけりけりけりけり  
ひびくとあまふりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

報恩のおまひをたふしむらく同好の輩を勧めてあま  
此月楚の地の長勝精舎りけりけりけりけりけりけりけり  
選章を石に刻りて百年の靈をまひりけりけりけりけり  
あまに昔をいふにさるせを枯野をめぐり心をそめて風雅の  
神のまろく見せまろくたはれむを祈りふと願ふまろく諸國  
の好士けりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
あめりて楚の名をいふ古きあまのいふは地りけりけり因縁ある  
事と遠近り昔むらけりけりけりけりけりけり身如芭蕉中無有堅  
い元禄乃風りけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
文字あるを多し人乃名のらりけりけりけりけりけりけり風雅に

侍とめぐる事乃涉くぬをともりて猪原の野人夏成美  
随齋の宅乃もとよる乎

南無佛集序 同年作

いほも百年乃むかへ一東の芭蕉草元禄乃表り居少れ  
と世とみへとも一味の素世りさちとて詞の花中は然風雅  
實そのほをてより牆をうけひ芽をわたりもの多れとる  
めくみにこれとやおれはまをわたり百年の忌辰よかき  
て報恩の集はるるはひろ葉をたもめてさうすとも  
こあはるるへ一仲も深川長慶寺はとれ昔翁乃遺  
墨をうけとてさうま乃發句塚と杉風老人のなげたきありし

奮出されはと津輕乃貞松吟友を會いかたのあはく懐旧乃  
俳諧をひやちみくけし諸家の句をひきひて集りあむけ  
あし貞松遠く郷土をうめられて都下り門生をひきあふる  
風雅をひきあむくして此地り杖をうめ此時小あへ然事  
乃より移るはけはも同好り告む心もへたりやちの集を  
たも佛とたけりる事と文鱗りさうさ翁乃休小とれり  
ちをわらみ成美此題号をわらふに我等小根小樹の  
もくいほてもよく芭蕉佛と歸命せし平等法雨乃うれ  
ほひりさき流しとすしきまらうと船もあはれを  
あうけしめむりかき吹あむむらわきほく此地りすみ

亦乃時はあへ給たまへしを改むるは、  
手紙のつれ葉のふりまに禿筆紙ぬりて書

早苗集序

同年作

みちのくにふのふ乃郡にもあれはる抄を  
中を遍昭寺乃水窟の屋敷にすわてあ  
はるをきりてきて世の人をて與せし  
なりを志すへ給たまへしを改むるは、  
説くも信夫郡より所にもあれはる  
するなりを改むるは、  
ありてその石にすりも改むるは、

ねむか乃石のほを土志中に  
又ふはせをの翁奥乃わろみち  
早苗を改むるは、  
形くあまて百重乃中へにあ  
なれてまゝか乃むしを改むるは、  
法師おきれの杖乃石を改むるは、  
ありきとてまゝく乃遺跡  
山口といふ処に翁のつれまへの句  
今を改むるは、  
形くひの乃石を改むるは、

お海むらに木の津くうまきさうらやあまおもふにわの説の石  
ふのありといふおれいせのあまうしとめて真しと物にうけ  
好す乃家におをたさきく乃みまの屋もてとやせしとれ  
すきたひらうりかへしとるあまを世にむれくせむや人  
く乃向をこひ集にあそきをたけうひあもほのめらけむし  
あまれあう海をけしめにあそきをたけうすくえらすり乃  
こあれうあま葉らうもむかしくあ乃おれたあし心に  
さう次とあそきをたけう乃

雨月帖序

同年作

ふるき連歌りあそきをたけうわのうらふときあそきしに

月のひらきあ乃あそきかへくさうけりてあそふ心をけきけり  
とやせのあそきを心わけて室を五月をまけけてすさう川の  
あそきにまめる人あまかれ西湖を美人うあまへて情を  
けりてしあも海を弄あまといひたむをあれ風色  
おとひらけりあまけりしそのあま川のあひらけりてあま  
あのみにけりてあまありて俳諧乃連句しと心をあそび  
あそびしあまありしあまありてすさう河の居をかみさ川  
乃けりてあまありしあまありてあまありて月を得蓬村  
あそきくさけりめ乃あそびしあまありてあまありて市井をけりて  
遠くぬいそ也上人の米うい酒賣の中にかきあそび心あそき



形くしと同柱乃れははる来きて西月乃困をぬすむらめ  
屋之月けり秋も月あきて西を起く日も倒乃狂句をうらみ  
いふ是を物に書らむらうら乃物す起らむと月はひく西  
はましくあををり乃おもひてくはりせむとあふく雨月乃  
あふく名を心遂おあく心に月と西をもてを屋してつく業然  
加ふもはかかはしう乃野人夏成美ふ也

送乙二歸古園 同年作

みちわくの乙二ぬ去年秋冬あつ河の雪をふみて東都の  
春りあをふすはりぬ旅乃心も志らうのとめてよとわら  
かつしう法林庵より鞋の駕をうめてよと一日を野

外り梅をけらうはる乃日と深川の雪を硯に汲て十七字の  
風情に方寸をあつ秋前後五十余日あふひは雅傷を  
吐てのら次あつあつそれをあふふあつあき友といふもわら  
詣らふらう中あつ日乃夜話よわ口質乃他意よさて  
雅情乃たらさるをうらみと十と論説をほす中世のあつ乃  
源切あつわ肺肝をけ次は似を道と笠をうらわけても  
古人乃あつ中いんれらるはらう乃たらひをうらわかくて  
梅らと柳みされていふ蓬窓のほくは分子乃液をせうを  
離情のこもりそりわらうらあつ次た墨水のあつれうらひ  
けして再旋乃胡をらふ乃

春はふー新まわろけすもく川  
あすよりや蝶乃ねくくにもきあむ

規矩録序 同年作

俳諧乃修行ハ梓匠輪輿の人ヲ規矩をあつるゝあつゝ  
形す本来一物あま心上よりなり出せるわさあまこと一線の  
おのひつやまらよ字卑俗野鄙ふおら入あひハ理屈裡を  
はぬうまかされり至るはれと世に非みらに名ある人の作意を  
かみしとておのゝんあききをあししつりは十余年乃  
非をちりむしはゆ多し人のはえ多しやまはあまのけい

きあえたるも机右に書きあめてあれはむあひて三復のおひ  
をらむかの梓匠輪輿のまくにあまらあまらなむむとこひ  
ねりよはるゝあ心の我心りあてりよ人の物まきのまふあも  
おもてのおまららあまらあまら諸子乃規矩く乃あまらあれを  
いはきにあまらあまらあまらあまらあまらあまらあまらあまら  
そのおれらあまらあまらあまらあまらあまらあまらあまらあまら  
きを捨てはひの師とあまらあまらあまらあまらあまらあまらあまら  
あけく迷中乃是非なりあまらあまらあまらあまらあまらあまらあまら  
随齋成美

あまらあまら集序

淮南乃たるれを北の地より名れと根とあると臨陽風土の  
多うひびすうにふ田屋うけ芭蕉の翁かつてたうあれり  
い層う平安のわの俳諧りうはうさうあはれとまうさう  
汁のりちたうもあううとあうう風調乃あまうかうさう  
いけう水土のううりけうさうはれあういへやも田舎ふみやあ  
てあうをういせえ繁花のあ中にするてひまうりをはぬ  
うさけううもあうもはれあううあう東郊や晋子の豪邁  
あうひとと天下乃俳諧を推勘してあはれうに酒落の  
風をおあせりもそのす急謎字乃体りああれ入てきく人も  
いふ者もさうふその落處をさうさうりりうの中あうとせれ

乃風といふまはあうひ世う唱ふれあういへともたけう  
支考う手すうあうて風格ううてひらへり野夫村童の  
雑談よあうういあ終を翁の風調よううあれと氷中水  
昌との似てそれ物ああうさう幸莠乃苗をみるうあう  
はれを風土のあういあもさう決心をうさうさううさう  
たううあはれあうり同調乃友あうと三人ひひはけ  
誓古乃巻う文臺にはもさう反故乃中あもあのはけ  
をううさう婦りうもあまハ竹の子乃代々の作者の跡を  
はあむあもあうねとれあうああうあ人くうも見せは  
あううさうあにあう板りうあうへてあうてあうの集を

かゝるありしつゝあれ実片へ花さへかゝるを記むし人の  
心乃色香をおのく袖すく山さむさあししは俳諧の  
多秘しそすも是にまひ水そきて牛をわきし雲を  
あめは時をあひねふやの小事を撰考りかゝるを淺  
字乃野人随京成美みまに筆を中紙

書九一年後

寛政甲寅八月作

雪あゝま空くせむくおき夜はつゆと春乃ひうを  
はらみ多月のほらさへはらるちつ乃目を疾のをもをを  
おととありおきを長しといもむもむ庵あゝし梅と  
ちまほとあすとるあの一しれよふおちとあを

みしつゝせむもはむしあはれ一年の集を長しみし  
つゝつゝをふしつゝあすれあ一日乃變化し  
あまふ事三百六十ははれけめををいを次友は記の  
けしおき心あゝし口をひりて笑ふ日五日りさしと  
いひらむいひせらにわりのせ何そひをそを志しはれその  
ちまゆ

墨 水翫月記

寛政申寅九月十三

友をはあぬこわめ乃ねらゝにあのみ推乃木屋敷の  
森陰り十三秋乃月はしあふは泰昌そもに流り  
うふれうは屋のわしちもあをひの影ふ海ありうは

あねをよききりて出づ庵乃門のまへに舟をよめ以片  
あまへすみの河の内見に中りよよとありし硯をよめ  
あねあり茶をよめさへて舟乃むし呂をよめし観音  
乃豊親をひくして月やそれ屋にひくは川五百歩の  
ひく竹三めり結木あちうすきり乃あちあめまね  
はひのあとあれとあね一輪の玉にをてをよめされて百般の  
媚をそへたまあやや海川ち山乃あち掌の飯住せる  
倡婦の水樓をかまへ月をひきあをむしあねはらとさばに  
系竹のまへそ竹ふふひ乃はあてとちうておほく掉を  
う屋すも尺ゆをわりあきや昔うきうに乃里とあちの河よ

あまたまをよめあちのまねあちのまねあちのまね  
あち懸石濱まよかち行てまよ河よらあち月と三竿に  
よて金波乃中に舟をうあちを口邊の中あちのまね  
けうらにきあえねらうのまをほくあちすくに催さねて  
硯をねらう向をねらうあちのまねあちのまねあちのまね  
みまわまねてあちのまねあちのまねあちのまねあちのまね  
わら舟や彩と月や乃あちのまね  
あちのまね河乃水を汲て陸成らあちのまねあちのまね  
六盤乃真りの湘水楚竹乃風流をね屋かちてあちのまね  
雲来里らもあちのまねあちのまねあちのまねあちのまね

舟に舟中抄しるをく 浅草乃の心志を耳をかくせし  
其真の心はさうして流しをういて舟をかくる

後乃月をうらにまきてあけよる

おもひてふ序 寛政乙卯年作

むうーわすをうわすもれあは弓矢のめくおひて  
馬下らら糸ゆく小みちのゆくてよ屋まらふやと  
亦おきあつ矢をうてあはれいおあせたりとおひたり  
あきまてあはれをみてされとよれりうてさくはたは  
なうてうちのうてよ世帰るぬとあはれいおあせたりとおひたり

りーして妻を海りて雨をりす情急をうく屋みて答を  
わすれあはれらもますあはれいされあはれいひひりー乃  
すれ人より書かおせり句をも目をされもあはれに  
耳をうてふけてもはれにうまらに手届く回すりすれ  
心あれうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
かあらめてもれりまれのあはれをうてはれいあはれ  
よみ是をえはれ花鳥にうけまらる人々の心をけみして  
世の中乃らうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
大なるもれりうらうらうらうらうらうらうらうら

散花集序

今ハひうしけりま乃らに鹿兒の里よりくまぬりやの能諧  
山李居士とてけうま記名乃きふえさる人あり乃いり一登  
水無瀬乃和哥あり栗のりくひをさるれ一名をねを  
ひて無心所着乃一体をばふねる一棹乃栗とすも乃ちや  
志けくま日ゆく海ありおのけうくみちをさるて薩たの  
校をさるものまきまうけ中ふも所ちら乃玉屑法師ら  
居士りひとくせをうけしそみの栗のつまうそれやえわく  
庵くもな一居士のりてひひりくくわき山水のたひはに  
たえはひとてひを松真象潜は杖ひくたを満とせり  
師ハわりき改志ち一任きり所もたのりくちとちらふせに

いんまに病身やうくよおいまさうそのあところたえしそ  
はひよみぬくま乃むき一れ相うりくとちらぬりけ  
はまをふく一の春居士の心けを果さむしそ法師系鞋  
をひひりにあみてまの所因ふりる居士の所の尾り  
たりてまよかられ修りありあひてむしそをかく理念をなけ  
くのあすりつりし門人よかひひて日ら一の里らに  
大龍寺といふ所に居士の遺章を石りあうりしもの  
人けくみぬくくさるそのちくハ申一き古松やも  
なまての心くへあり一その句

らうはれ乃花よとあさるあうりく

榮落一瞬のけしきをわづれいふも法を待たりの如き  
 かの無心所着乃けりひよを明し出されりも法を待たりの心乃  
 たるまむとあるものとおのけりか應し法師をて白河の  
 せれあえひとすにその事乃りけり集のけりめに書法を  
 すとひよにけりもあつて書をとりて落花りひよひよ  
 性事をはせよ

隠説

聖人乃端し麟を包隠者の兆を鹿形り麻碌音相かよ  
 へも隠士とひよする名をけりもあつて碌たるひ  
 とのけり

右寛政卯八月廿七日曉天夢中作覺而不換  
 一字録焉

贅亭記 寛政乙卯冬十月

かねてこれ東江寺にありせありはを屋を佛を此の  
 と津の園多田乃荘石峯寺乃靈佛ありて五百年の  
 ひより千戈のさあはれ寺塔も闘争乃らまるとなる僧  
 侶も法なく迹らるるものあり石乃ひひりて  
 年月なるといけりて土中にけりてせりて其の後  
 世中そのまをてほり出はるをけり申忍ありに  
 幸く所郷よりけりてまをぬると画傳乃趣はけりれとかな



石乃ほとも寶庫に法なへて文永二年三月砂羅連山石峯  
寺と名は法華の文字乃おほくくろえ侍りいしつる經寺  
院少く土石わささなり以物ありくまの御堂の處うまに  
茅屋のちてをうくくひ侍りり形不し新瑞はききに  
法といふ乃狹室を法くまを廣十一丈にみよん東南に窓を  
ひく冬終日くまをむひて筆をれぬ硯まむし中に一炉を  
うまへて寒をぬせぬ茶錢を敷といへやも蕉素乃堂を  
うくひつる紹休二子乃法をうけつる次々世に宣乃屋  
厚くおほく竹の椽板乃ひさしつる世にいりくまを  
以少を厚く法をうけつるり法を屋て法のくまをうく

率ゆくわまひくるとたのしとおもひて信心入またりすはくじ  
とよくおろしたほくおれとくせぬく字すふりまをぬる身ハ  
事をはみれ物をまぐるうしつてわけくひるまをうくま  
なす法ひにおひひく一人もまをうくひくし心乃  
うこれとめてひる各用乃室をを法うきくま中人も  
ひるまひひり法ままにけりま物まへ乃いてまをうくやう  
なまはして屋く贅亭と名はけりる屋に椽口又  
株と椽て春をまのまよとまの拍喜桐いけくまの  
竹まは法うくはくひくまにおの法うく木藤おほくて  
ふくめわくろあしつるりまを鳥語まものひくすうく

我乃木草をこまなひをさうへに五尺乃盆池わ蓮乃  
根をふせ魚をこまな土地ハ菜にうろく水清くて青泥の芹  
白鴉の栗も處につめてこねうろく次家ハ葡萄翁はま  
子りりて出入りにはあても杖をびへ門は海川をけは風  
志のうなる日ハ雅子とあはさへて何とやらをいひかき  
歩をすじは海川浅草乃御堂じく牛鬼といふも此  
あて安居の法師をおろろくといひけえ一人ハ人  
たれ居ろあもきあえ侍る今乃小蛇をひひもけりて  
長嘯子の日記も困ゆすうてはあまると書るは新事なり  
真土山ハまきを川よのをみて万葉乃古名を忘たふ木母寺ハ

梅あ丸の古墳のふら沈ハそのけ御宗乃回松とを鳥  
越り天竺乃変をおまひ牛島に貞觀の碑をよりぬ業平  
天神ハ在中將乃竹をのみ一吾妻の森もあらぬ娘乃  
みう子のうらあま牛頭山ハくくの御前にやまを駒くこハ  
花形ハけくまね石濱ハ千葉家乃古城砂利場に實盛ハ  
石塔をみる三圍ハちく晋子ハ雨をあひけく波山を序  
嵐雪ハ雪をのら次上野浅草のけりく一本のけりくいと  
けりくふれまきまははけりあまハくくて独酌乃杯ハ對す  
けりくあまも人にあまねをみそまらけりあま月を  
あまくく境界乃あまをけりてけりるに草をこらりて

妄語をさるはこそ贅乃ちと贅貯るも亦乃ち

... (faded text) ...

四山葉卷一終



...



Handwritten text in a cursive script, possibly a signature or a name, located at the bottom right of the right page.

